

東日本大震災から五年、 被災した地域の 子どもたちは……

畑山みさ子

ケア宮城代表・宮城学院女子大学名誉教授

未曾有の大災害をもたらした二〇一一年三月十一日の東日本大震災から五年が過ぎました。私は長年、大学で発達心理学を担当し、主に保育者と教員の養成などにあたってきました。東日本大震災直後の三月末の定年退職と同時に、子どもの教育・保育・養育にあたる人たちを支援することを目的に、日本学校心理士会宮城支部、日本臨床発達心理士東北支部、宮城県臨床心理士会会員の有志からなる支援団体「ケア宮城」を立ちあげました。そして宮城県教育委員会と連携し、教員と保護者への「心のケア研修会」を各地で開催し、学童保育や子どもに関わる支援者への研修活動も行っていきます。

五年が経ち、被災した三県以外の地域では、被災した地域の現状が新聞やテレビで取り上げられることも日常的

にはほとんどなくなりました。しかし、被災した地域の復興はようやく途に就いたばかりです。

被災した地域では、過疎化と少子高齢化が急速に進み、大きな問題となってきました。さらに、大震災は家族の機能や子育ての機能をも低下させたと考えられます。生活環境が激変したなかで、保護者の精神的不安定さに起因する家庭内暴力や児童虐待も多発しています。被災した地域の学校からは、落ち着かない子どもが増えているとの声も聞かれます。宮城県の中学校での不登校発生率の高さといじめ問題も、震災後の家庭環境の悪化と無関係ではないでしょう。

隣家の話し声が筒抜けの狭い仮設住宅では、子どもを静かにさせておくための手段として、容易にゲーム機を

買いとった家庭が多かったようです。ゲーム機やスマホ等のIT機器の普及は、便利さと引き換えに、人の心の交流や直接的接触の機会を奪う危険をもたらしたように思えます。人は他者と直接顔をあわせて会話し、はじめて相手の気持ちや感情の理解ができるのです。いじめ問題の背景に、他者の感情の理解と共感がむずかしい子どもたちが増えている状況があることも考えられます。

そのような状況下でも、多くの子どもたちは、すこやかな成長を願って支援している大人たちに支えられながら元気にたくましく成長していきます。被災した地域ではとりわけ、核家族の増加と同時に、生活再建のために、働かなければならなくなってしまう保護者が増えたことにより、子育て

支援の場として乳幼児保育や学童保育への需要が高まり、そのいっそうの充実が求められています。そのような場で保育者や学童保育指導員が子どもたちのためにまず第一にすべきことは、「安心・安全の確保」であることは言うまでもありません。そして安心を届けるために、学童保育指導員は個々の子どもと顔をあわせて会話をし、子どもの話に耳をかたむけ、子どもの心を理解し、心に寄り添いながら、子どもの持っている力を引き出し、支えるように努めます。

子どものすこやかな心の成長発達のためには、保護者はもちろん、学童保育指導員や教員らが互いに顔の見える関係のなかで、連携して支援していくことが大事です。お迎え時などに顔をあわせたとき以外にも、連絡帳などを

通して情報交換を密にしながら、子どもの発達を支援する者同士が共に支えあう関係をつくっていくようにしましょう。

この五年間、全力で子どもたちの支援にあたってきた方々も少なくありません。疲れが出てくる頃かもしれません。支援者自身の健康の保持も大事な課題です。子どもの心の支援者は、常に自分自身の精神的健康を保つように努めましょう。そのためには、各自が仕事以外にリラックスできる時間をとり、気分転換を上手にはかるようにしましょう。そして子どもの支援者は、自分自身にやさしく、他者にもやさしく……

平成二八年熊本地震で被災された方々の一日も早い安全安心な生活への復帰をお祈りいたします。